

IV

街道の様子



(第58景) 馬牧より

1 与倉泉

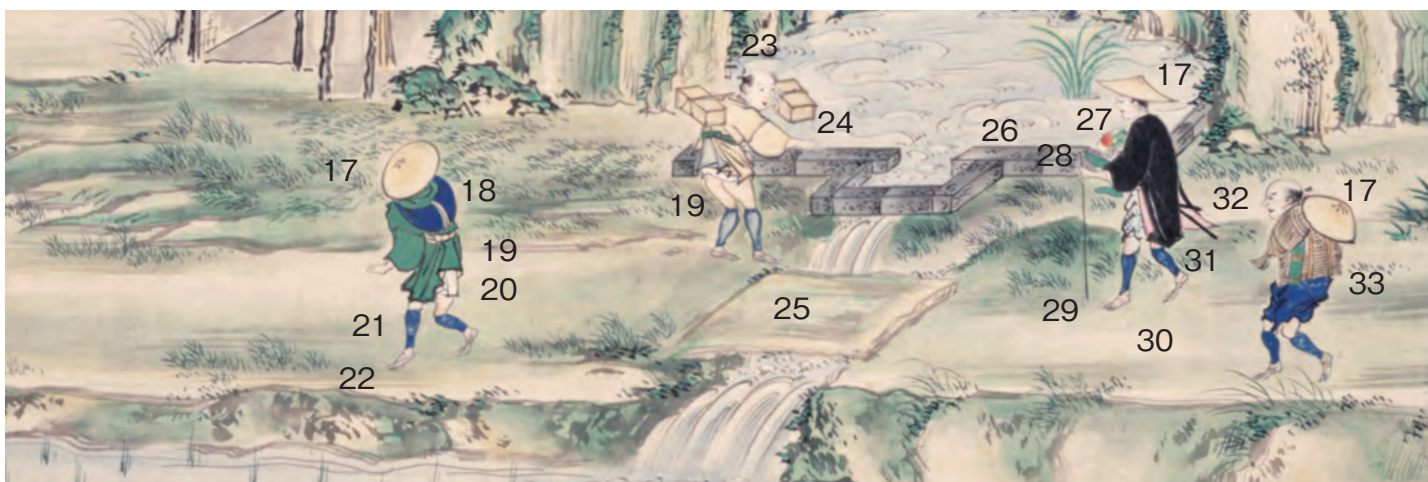


(第72景) 与倉泉

- | | |
|----------|-----------|
| 1 杉 | 20 褌 |
| 2 畦道 | 21 脚絆 |
| 3 稲 | 22 草鞋 |
| 4 店? | 23 飛脚 |
| 5 田 (水田) | 24 鉢箱 |
| 6 泉 | 25 橋 |
| 7 用水路 | 26 縁石 |
| 8 結び髪 | 27 扇 |
| 9 藁苞 | 28 柄袋 |
| 10 鞭 | 29 杖 |
| 11 手綱 | 30 武士 |
| 12 牛 | 31 鞆 (脇差) |
| 13 積荷 | 32 鞆 (打刀) |
| 14 尻懸 | 33 日蓑 |
| 15 腹帯 | |
| 16 胸懸 | |
| 17 笠 | |
| 18 背負荷 | |
| 19 尻絡 | |

a 與倉泉



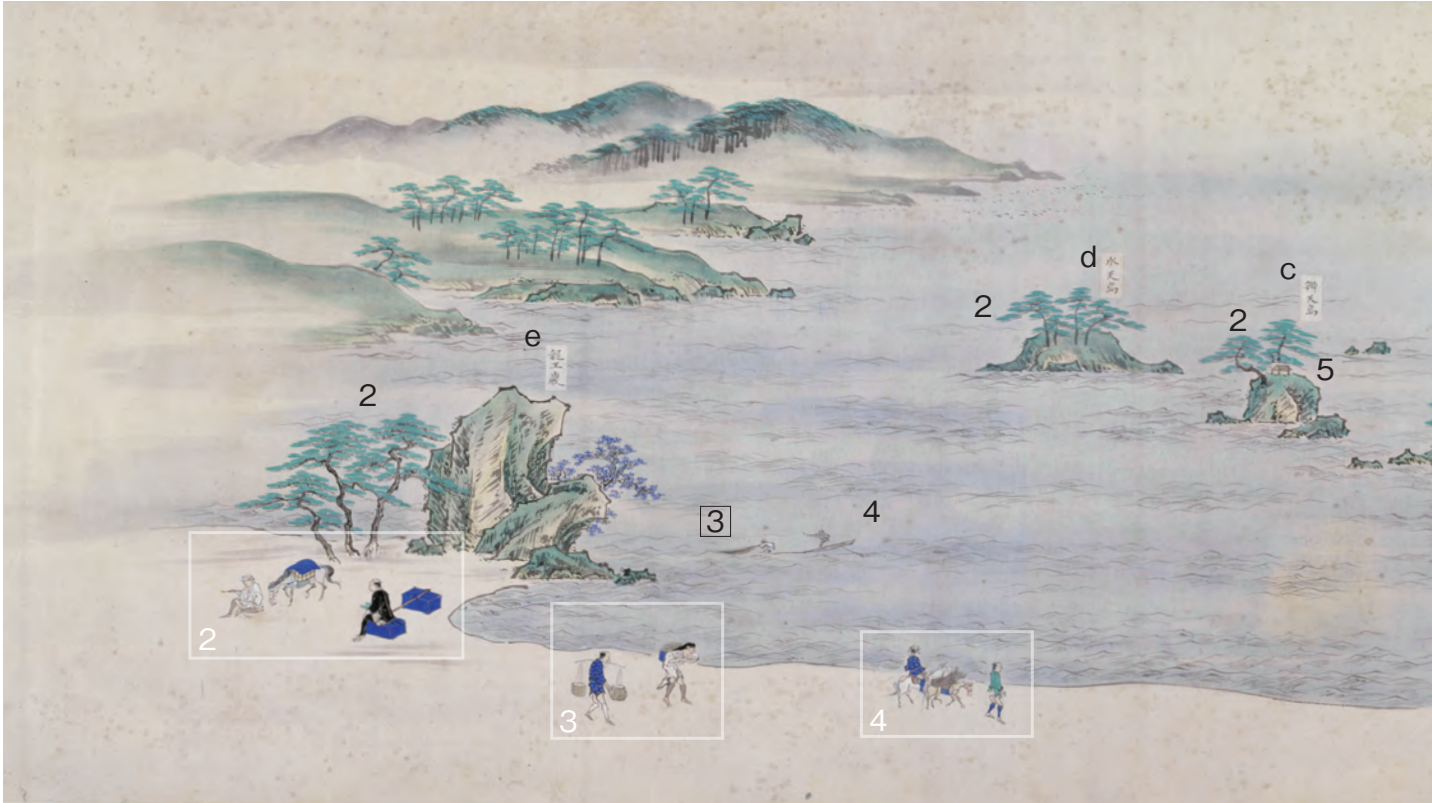


与倉泉（現、日置市吹上町与倉）。谷山筋往還、伊作筋（街道）にある泉。「与倉の井川（キカハ）」と称される。与倉村は左上方に見える。泉は縦1丈3尺5寸（約4.5メートル）、横7尺（約2.1メートル）、深さ2尺余り（約60センチメートル）で、清水が常に湧出して、水田の用水に使われた。泉の中に生えている草は稲で、稲穂が描かれて、この稲の出来でその年の豊凶を占うというが、前面の水田

は田植えしたばかりのようだ。武士・飛脚や旅人、牛を追う百姓とみられる人物が往来しているが、泉の水を飲むようなことはしていない。泉の左の建物は休憩所のようにも見えるが、人は見えず、『薩藩勝景百図考』に、そのような記事もない。右の旅人と左の牛追いは、ともに背に藁わら蓑かさを負っている。

（得能壽美）

2 龍王巖 (1)



(第26景) 龍王巖

- | | | |
|---------|---------------------------|----------|
| 1 帆船 | 9 <small>ちよんまげ</small> 丁髷 | 17 切妻草葺き |
| 2 松 | 10 小袖 | 18 掘立柱 |
| 3 漁をする | 11 <small>わらし</small> 草鞋 | a 龍王巖 |
| 4 小舟 | 12 <small>きやほん</small> 脚絆 | b 愛染島 |
| 5 弁天祠 | 13 旅人 (徒歩) | c 弁天島 |
| 6 草葺家屋 | 14 丸髷 | d 水天島 |
| 7 松林 | 15 束髪 | e 龍王巖 |
| 8 風呂敷包み | 16 羽織または小袖をはおる | |

「龍王巖」は、阿久根市西目にある高之口 (鷹之口) にあたる [東條 2012]。鹿児島城下から肥後国へ至る主要街道であった出水筋 (薩摩街道) の経路であった。『三国名勝図会』巻15の薩摩国出水郡に「鷹口海湾」の見出しがある。「一奇岩ありて八大龍王を崇めて龍王岩と名づく」とあり、さらに「龍王岩」より「南に数歩にして小島あり。弁天島という。弁天祠を建つ。又数歩を隔て、水天島、愛染島などいへる小嶼連綴す」とし、干潮の時は、歩いてわたれ

ることがしるされている。海には舟の上から投網で漁をしている人が描かれ、遠景にも帆掛舟が見えている。龍王巖のすぐそばに休憩している旅姿の武士がいる (部分2)。画面左側の天秤棒を担いでいる男性は脚絆を着けているので行商人とみて良いだろう。白い着物の人物は宗教者のようにもみえる (部分3)。中央の2頭の馬は、手前が柴を駄載で運搬している人、奥は騎乗者が自ら手綱を取り操縦している。その進行方向のさきには、馬子にひかれた馬



部分1

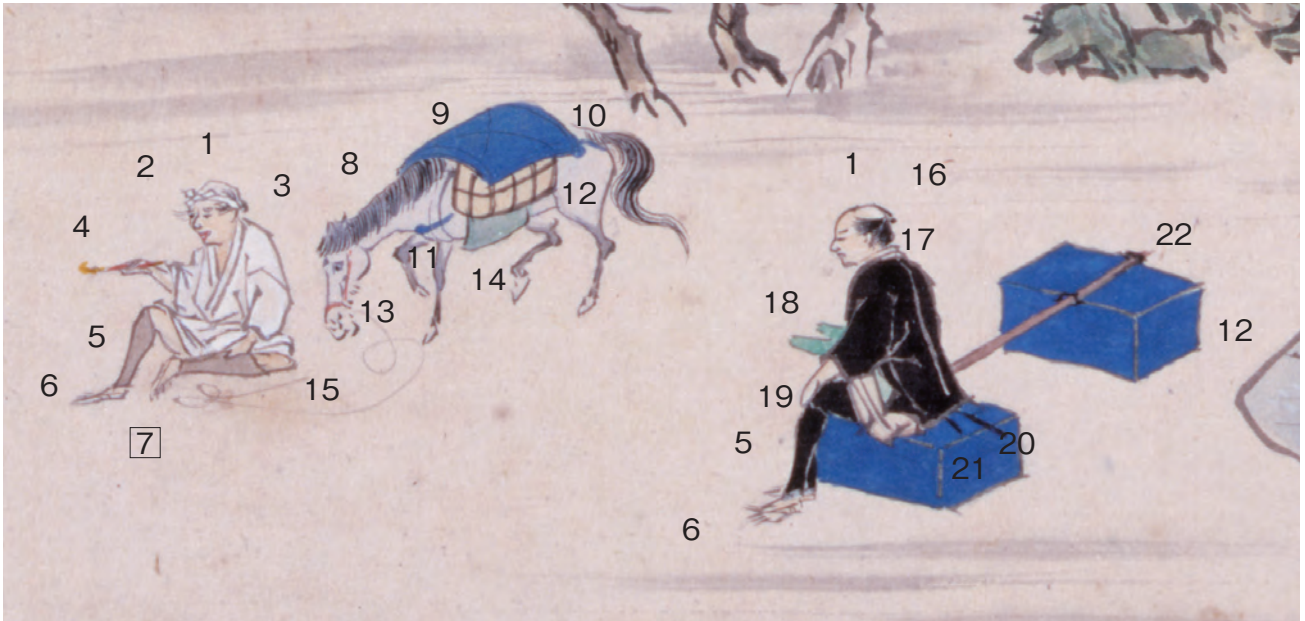
に武士が乗っているのが見える。右奥には、集落がみえ、世代のちがう女性が3人描かれており、行商人が通過している。ただ、『薩藩名勝志』巻9の「高之口龍王岩（鷹口海湾）」の場面とほぼ同じ所作の人物を描いて、より詳細に描かれているので、写生ではなく、より類型的な描写になっている印象を全体的にうける。

部分1は、世代の違う女性3人のうち、手前に見えている老婆は髪が尼削で肩あたりで切りそろえ

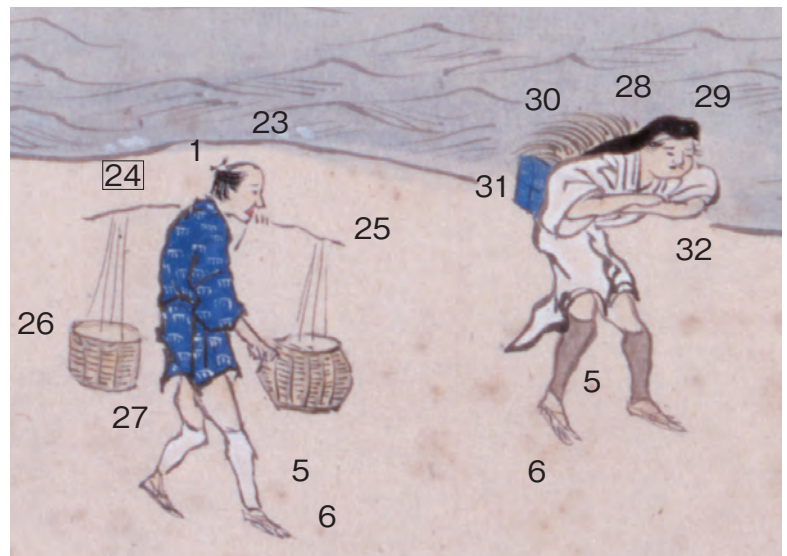
てあり、羽織、または小袖をはおっている。鶯色の着物の成人女性は丸髻、赤い着物の子供と思われる人物は束髪に描かれている。建物は、草葺で切妻の屋根。柱が掘立柱になっている点、街道に面して土間が開いている点などが通常の民家としてはやや違和感がある。青い風呂敷包みを背負った人物は、大きな荷物を重たそうに担いでいる点や道中差を携帯していない点などから行商人と判断した。

(小島摩文)

3 龍王巖 (2)

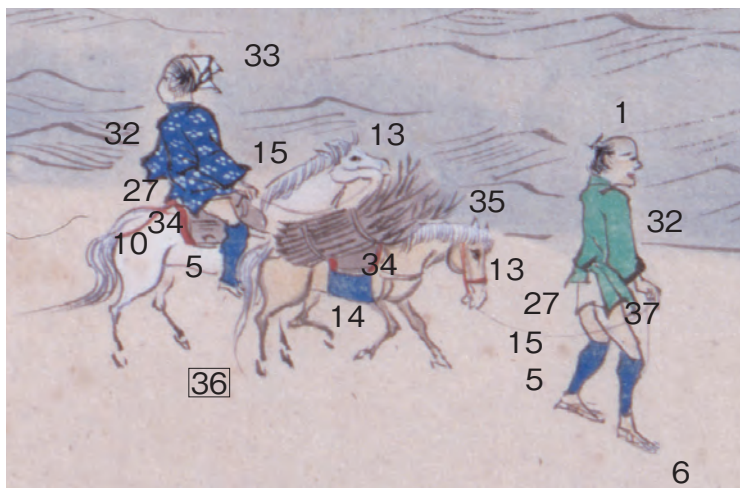


部分 2

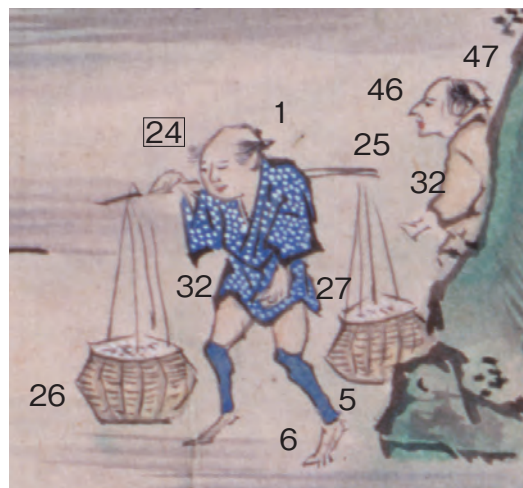


部分 3

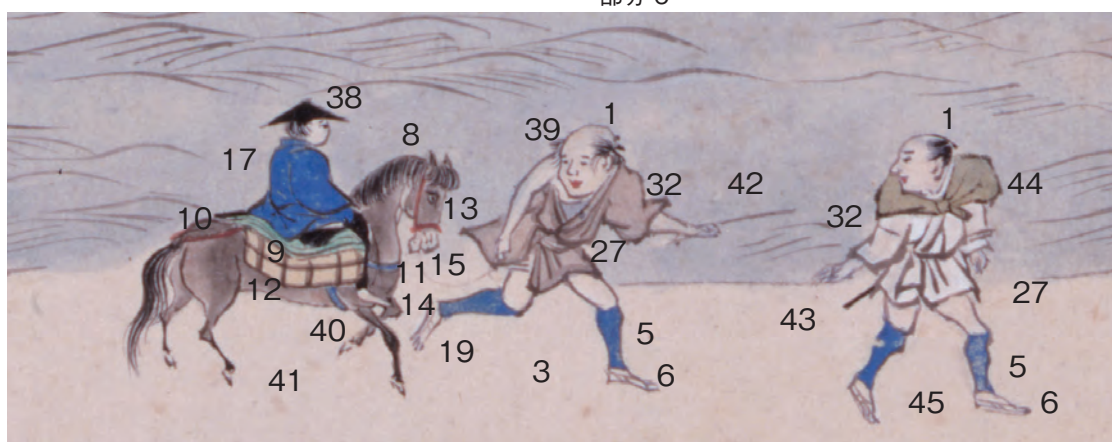
- | | | |
|-----------------------------|------------------------|----------------------------------|
| 1 丁髷 ^{ちよんまげ} | 17 羽織 ^{うゑ} | 33 手拭 (道中被?) ^{どうちゅうかぶり} |
| 2 鉢巻 ^{はちまき} | 18 柄袋 ^{つかぶくろ} | 34 鞍 |
| 3 馬子 | 19 股引 | 35 柴 |
| 4 煙管 | 20 鞆 (打刀) | 36 柴を運ぶ |
| 5 脚絆 ^{まきはん} | 21 鞆 (脇差) | 37 胴裏 |
| 6 草鞋 ^{わらし} | 22 棒 | 38 笠 |
| 7 煙草を吸う | 23 行商人 | 39 肩脱ぎ |
| 8 馬 | 24 天秤棒を担ぐ | 40 腹帯 |
| 9 座布団 | 25 天秤棒 (さし) | 41 旅する武士 (乗掛) |
| 10 尻懸 ^{しりがい} | 26 籠 | 42 鞭 |
| 11 胸懸 ^{むながい} | 27 尻絡 ^{しりからげ} | 43 鞆 (道中差) ^{どうちゅうざし} |
| 12 明荷葛籠 ^{あけにづつら} | 28 旅する宗教者? | 44 風呂敷包み |
| 13 頭絡 (おもて) ^{どうらく} | 29 被り物? | 45 旅する町人 (徒歩) |
| 14 腹掛 ^{はらかけ} | 30 蓑? | 46 岩陰の女性 |
| 15 手綱 ^{てな} | 31 行李 | 47 髪型 (不明) |
| 16 旅装の武士 | 32 小袖 | |



部分 4



部分 6



部分 5

部分 2 は、乗掛^{のりかけ}の道中での休憩の様子。乗掛は、馬に振分の明荷葛籠と旅人を乗せて運ぶことをいい、近世の引き馬での旅の標準的な形である。武士は、旅装で、緑青色の柄袋^{つかぶくろ}が見えている。明荷に腰掛けているが、馬にも荷がかかっており、描き誤りの可能性もある。

部分 3 で、天秤を担いでいる者は、かごの形が左右で異なっていたり、天秤の形が雑な点が興味ぶかい。地元の農民とも考えられるが脚絆を着けているので行商人とも考えられる。白い着物の人物は、特殊な被り物をしている点、装束が白である点などからなんらかの宗教者と考えられる。

部分 4 では、2 頭の馬のうち、画面手前が柴を駄載で運搬、奥は騎乗者が自ら手綱を取り操縦している。騎乗者は武士には見えないが、こうした乗り方は基本的には武士にしか許されていない。また、騎乗者が後ろを振り返っている点、手拭の被り方など

が気に掛かる。詳細には判別できないが道中被という結び方に近い。また、白い馬というのも珍しい。

部分 5 は、乗掛で旅の武士を運んでいるところである。部分 2 の休憩している武士と馬子と対照的である。徒歩で旅する人は、風呂敷包みを背負い、道中差を携帯している。江戸時代は武士階級以外の者が刀を携帯することは許されていなかったが、旅行中は護身用に短刀を携帯することが身分にかかわらず許されていた。

部分 6 で、天秤棒を担いでいる者は、部分 2 の天秤棒の形より整った形の天秤棒を担ぐ者として描かれている。籠も左右同じ形になっている。部分 2 と同様に地元の農民とも考えられるが、脚絆を着けているので行商人の可能性もある。岩陰の人物は、髪型などから女性と判断した。何をしているかは不明。

(小島摩文)

4 大島



(第27景) 大島

- | | |
|-----------|----------|
| 1 蒲葵 (枇榔) | 15 武士 |
| 2 松 | 16 槍持ち |
| 3 帆船 | 17 街道を行く |
| 4 小舟 | 18 笠 |
| 5 阿久根浦 | 19 馬 |
| 6 柵? | 20 槍 |
| 7 葺 | |
| 8 瓦葺家屋 | a 大島 ウシマ |
| 9 草葺家屋 | b 桑島 カシマ |
| 10 挨拶をする | c 山王社 |
| 11 網干し | d 金比羅 |
| 12 出水筋 | e 小島 |
| 13 築地堀 | f 元ノ島 |
| 14 板葺家屋 | |

阿久根の浦とその沖合に浮かぶ四つの島が描かれている。

阿久根では17世紀に唐通詞として藩に迎えられた中国人の藍会栄が、河南源兵衛と称し、唐取引で大いに活躍した。一族は後に藩の庇護のもと御用船を支配し、薩南諸島や琉球、上方、江戸への流通を請け負い、村の発展に大きく貢献した。海岸沿いの往来は出水筋(薩摩街道)であろう。武士と馬の

姿が見られる。漁村としてだけでなく、交易基地、参勤交代等の要所としても栄えていたことがうかがえる。

沖合の島のうち、大島は、その形から琵琶島、桑島は、ひょうたん島、小島は、三味線の駒になぞらえ駒島とも呼ばれる。『三国名勝図会』巻15では、これらの島々を「母子島」として描く。これは、古くから、大島を雄島あるいは父島、桑島を雌島ある



いは母島と呼び、小島を子島とし、親子が仲良く寄り添う姿になぞらえて呼んでいたことによる。大島には、2代藩主島津光久（1616-1695年）が放った鹿が始まりとされる多くの鹿が現在でも生息している。また、1784（天明4）年に8代藩主島津重豪（1745-1833年）が、河南源兵衛の所有する琉球貿易船の航海安全を祈願して創建した金比羅神社がある。四島のうち、阿久根海岸から最も遠い桑島は、

周囲の大部分が断崖で囲まれているため、人が立ち寄りにくく、その西海岸が番所からの死角になっていたことから、密貿易の取引所として利用されていた。今は失われてしまったが、以前は蒲葵（枇榔）^{びろう}が生い茂り、密貿易商人にとっては恰好の場であった。（駒走昭二）

5 唐浜



(第28景) 唐浜

- | | |
|---------|-----------|
| 1 人形岩 | 15 槍持ち |
| 2 寺島 | 16 荷を担ぐ |
| 3 裸島 | 17 お辞儀をする |
| 4 松 | 18 門 |
| 5 帆船 | 19 草葺家屋 |
| 6 西方浦 | 20 網 |
| 7 小舟 | |
| 8 艫を漕ぐ | a 唐浜 |
| 9 柵 | |
| 10 石垣 | |
| 11 御飯屋 | |
| 12 板葺家屋 | |
| 13 出水筋 | |
| 14 武士 | |

西方浦から唐浜方面を眺望した風景。古来、風光明媚の地として知られ、俳諧にも詠まれている。画面では、西方浦の屋敷、浜辺で漁をする人々、また海岸沿いに点在する奇岩などが描かれている。唐浜の地名は、かつて唐船が来泊していたことによる。

海岸沿いに描かれた人形岩は、親子の人形に似ていることから名付けられたもので、水中深く沈んでしまった夫の帰りを待つ妻とその乳飲み子が岩に

なって現れたとの伝説が伝わる（現地案内板『人形岩物語』西方地区コミュニティ協議会）。

画面手前の往来は、薩摩街道の一部をなす出水筋で、阿久根から海岸線を南下してきて、ここ西方浦で方角を東へと大きく変え、内陸部へ入り込む。

手前右の石垣のある屋敷は西方御飯屋を描いたものであろう。右奥の建物は、異国船の通行を監視する遠見番所の建物であろうか。（駒走昭二）



6 脇本



(第29景) 脇本湊

- | | | |
|---------|-----------|---------------------------------|
| 1 津口番所 | 8 白浜 | 15 板葺家屋 |
| 2 帆船 | 9 小舟 | 16 草葺家屋 |
| 3 松 | 10 貝を採る | 17 柵 |
| 4 仏岩 | 11 杓 | a <small>わきもとみなと</small>
脇本湊 |
| 5 網 | 12 天秤棒 | |
| 6 寺島 | 13 天秤棒を担ぐ | |
| 7 挨拶をする | 14 桶 | |

南に向かって開かれた脇本湾の港が描かれている。天然の地形に恵まれた良港で、昔から指宿の山川と並んで台風時の避難港としても有名だった。画面の手前に描かれた入り江は、梶之浦であろうか。伝統的にアサリ漁が盛んで、本図にも杓、天秤棒、桶を持った漁師の姿が描かれている。

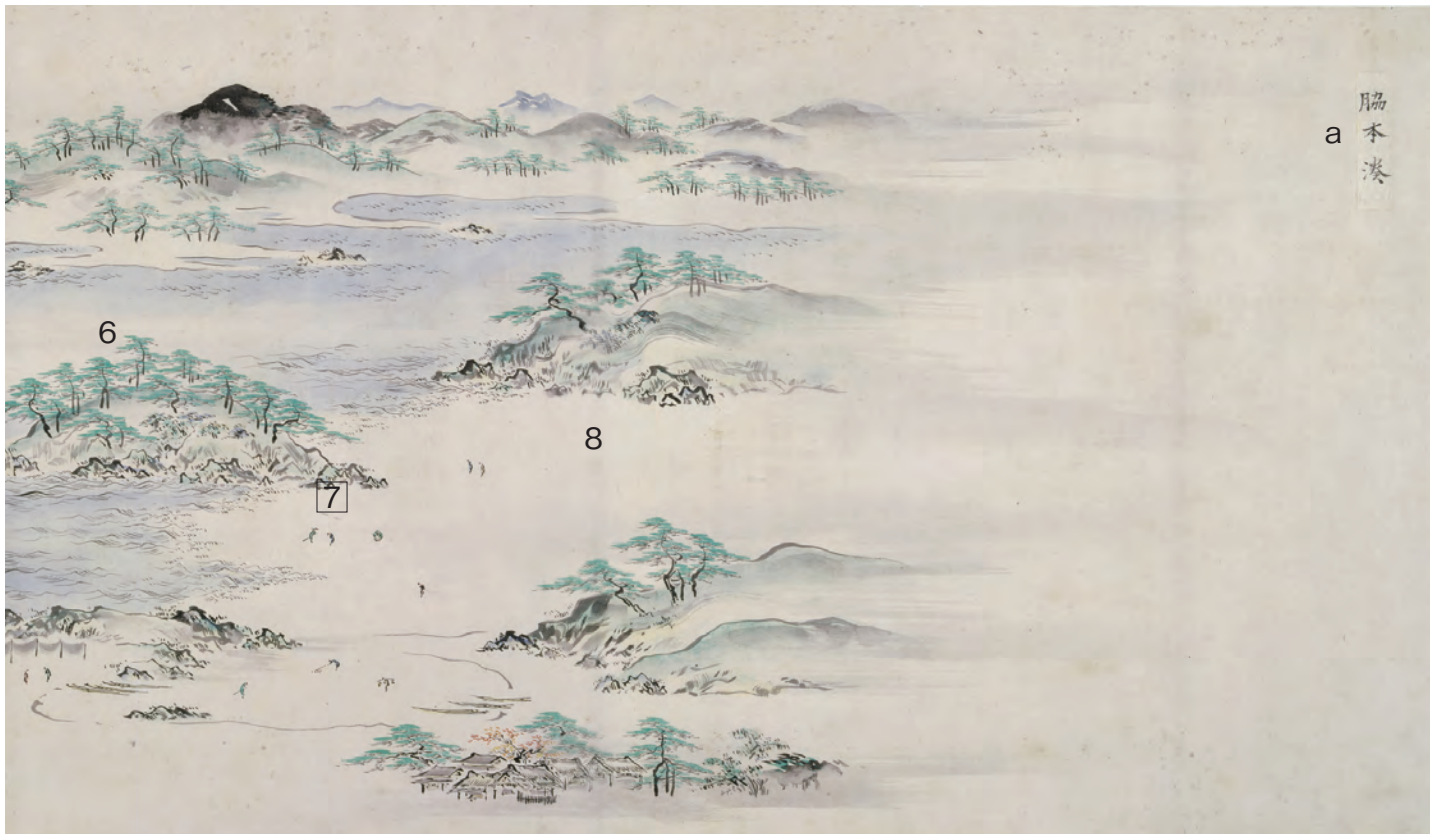
画面の上部に描かれた岬は番所ノ鼻で、津口番所が描かれている。西目（薩摩半島）を行き来する船の監視を行う脇本津口番所は、東目（大隅半島）の志布志番所と並び、薩摩藩で最も重要な番所の一つであった。もともと薩摩藩では藩内の各港にそれぞれ番所を置いて船の出入りを監視していたが、藩外への出入りに関しては改めてここで厳重な検査が行

われた。

また、脇本の浦は近世期に大がかりな干拓が行われたが、その際に築かれた潮留堤防は、その上部が長島と阿久根の間を最短で結ぶ主要道として重要な役割を果たした。

湾内に浮かぶ寺島は、周囲約500メートルの円形の島で、干潮時には陸続きとなる。画面は、ちょうど陸続きになったところである。自然の防波堤としての役割を果たし、地元の人々に古くから親しまれている。明治時代に活躍した同地域出身の外務卿寺島宗則が、この島の名前をとって旧姓松木から改姓したことで知られる。

(駒走昭二)



7 加治木



(第60景) 蔵王嶽

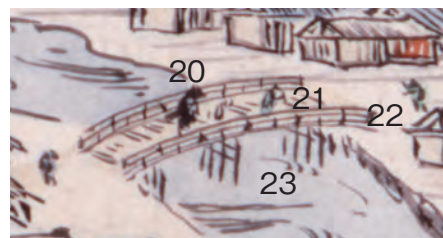
- | | | |
|-----------|------------|--------|
| 1 加治木〈地名〉 | 11 杉 | 21 町人？ |
| 2 網掛川河口 | 12 草葺家屋 | 22 欄干 |
| 3 帆船 | 13 松 | 23 橋桁 |
| 4 黒川河口 | 14 網掛橋 | |
| 5 黒川岬 | 15 大口筋 | a 蔵王嶽 |
| 6 小浜〈地名〉 | 16 日向筋 | b 蔵王嶽 |
| 7 小舟 | 17 板葺家屋 | c 龍門瀑布 |
| 8 集落 | 18 御飯屋？ | d 春日神社 |
| 9 山道 | 19 土蔵 | |
| 10 橋 | 20 笠を被った武士 | |

鹿兒島湾の最北部に位置する加治木^{かじき}の風景を、湾から北に向かって眺めた図である。左には、網掛川^{あみかけがわ}の河口として発展した加治木浦を擁する加治木が描かれている。網掛橋は鹿兒島城下から肥後国に向かう大口筋（街道）と日向国に向かう日向筋の分岐点で、海上交通もあいまって、加治木の町は交通の要衝だった。図を見ると、町の中心を通る日向筋に沿って草葺きと瓦葺きの家屋が並び、網掛橋には笠を被った武士が歩き、町人と思われる人物が欄干から

川を覗いている。町から1キロメートルほど北側に、小高い蔵王岳^{ざおうだけ}が見える。400万年以上も前に堆積岩に安山岩が貫入し、その後周囲の堆積岩が侵食されて安山岩の部分だけが残り円筒状の山になったもので、加治木の名勝地である。海拔164メートルで、頂上からは黒川岬の先に桜島を眺めることができ、加治木の町を経て隼人、国分方面が見える。蔵王嶽から北西1キロメートル弱のところに、龍門滝がある。網掛川の中流にあり、昔、「唐土の人」が中国



部分 1



部分 2

黄河の龍門滝に似ているのでこの名をつけたという
 言い伝えがある（『三国名勝図会』巻37）。初代藩
 主島津家久（1576-1638年）の和歌にも「往さ来
 さ通行人もいましはしたち返り見る瀧のしらいと」
 と詠まれている（『柁城名勝志』巻1）。その西側
 には春日神社（春日大明神）が描かれている。一条天
 皇の時代、1006（寛弘3）年に関白藤原頼忠の三男
 経平が加治木を訪れ、郡司の婿となって加治木家を
 継いだ。藤原氏の氏神である奈良の春日神社の神霊

を勧請して祀ったのが、この春日神社だと伝えられ
 る。社殿は1816（文化13）年に焼失し、1822（文
 政5）年に再建された。『薩藩勝景百図』は1815（文
 化12）年に完成しており、またそもそも『薩藩名
 勝志』（1806年序）の挿絵に基づいて作画されてい
 るので、ここに描かれているのは焼失前の社殿であ
 る。（小熊誠）

8 福山



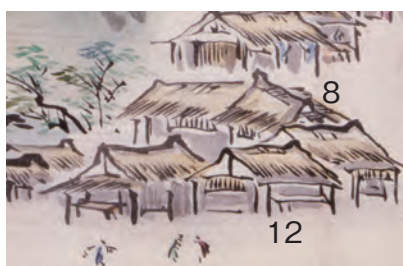
(第58景) 馬牧

- | | | |
|---------|--------|----------|
| 1 集落 | 7 馬を曳く | 13 小舟 |
| 2 松林 | 8 草葺き | 14 馬が群れる |
| 3 浜 | 9 帆船 | 15 野馬 |
| 4 福山野馬牧 | 10 木橋 | a 馬牧 |
| 5 日向筋 | 11 湊川 | b 宮浦神社 |
| 6 鳥居 | 12 茶屋? | |

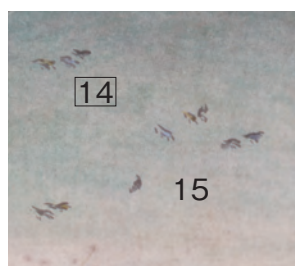
福山（現、霧島市福山町）の宮浦神社を中心とし、浜の景観と、はるかに広がる福山野馬牧^{のままき}を遠景から描いている。宮浦神社前の日向筋^{ひゅうがすじ}（街道）には家々が密集した集落が連なっている。人や馬・漁船は、かろうじて判別することができるが、日向筋を多くの人々が行き交い、馬の姿も見られる。馬の乗り手は武士と見え、槍持ちの従者が続く。海岸部から宮浦神社付近まで防砂効果の高い松の木が目立ち、神社前には浜に沿って家々が密集し、門前町の賑わい

を感じさせる。家々の屋根はほとんどが草葺きである。帆船が停泊している湊川の河口付近の集落には、腰掛けのある茶屋らしき建物が見え、旅人の憩いの場であったことをうかがわせる。

台地の中腹から頂上にかけての台地では、野馬の放牧が行われている。これは福山野馬牧で、1580（天正8）年4月、島津氏第16代当主の島津義久が鹿屋高牧野（現、鹿屋市）にあった牧場から100頭の馬を福山に移し、牧とした。周囲10里半（約45



部分 1



部分 2



部分 3

キロメートル)で薩摩藩一の馬牧となり、1863(文久3)年まで続いた。福山野馬牧が広がる台地は海拔高度が300メートルほどで、気温が冷涼となる場所である。『薩藩勝景百図考』巻3「馬牧」の項では「又水澤に乏しからず 猶且雲巖の處々に雄なる風樹の時々に震ふものあれい」と記し、野馬の成育に適した野趣溢れる自然環境であったことが指摘されている。毎年8月には2歳駒を獲る行事があり、周辺20か村から「申目立」という民夫11000人余

が動員されて野馬を追い、捕らえた馬に三ツ星の焼印を押した。

1709(宝永6)年には福山野馬牧には2263頭の馬がいたが、1779(安永8)年の桜島噴火の被害で、その10年後の1789(寛政元)年には1034頭まで減少する。その後、2000頭超まで復帰している。ふもとの宮浦神社には島津義久の代から、福山牧より青毛の駒1頭が奉納されたが、1726(享保11)年以降は金納となった。(富澤達三)

9 志布志



(第40景) 有明浦

- | | | |
|----------|--------|--------|
| 1 松林 | 8 鳥居 | a 有明浦 |
| 2 漁船 | 9 権現島 | b 波上権現 |
| ③ 魚を追い込む | 10 茅葺き | c 永泰寺 |
| ④ 網を引く | 11 鐘楼 | d 宝満寺 |
| 5 津口番所 | 12 山門 | e 大慈寺 |
| 6 石垣 | | f 高熊嶽 |
| 7 前川 | | |

有明浦（有明湾）、すなわち志布志湾は、大隅半島の基部にある。鹿児島城下から加治木・福山を経由して志布志に至る東回りの街道（志布志筋）の到達点であり、琉球・大坂方面への物資の中継ならびに大隅半島や日向方面の蔵米の集積地でもあった。水陸交通の要所として、海岸部の夏井に番所（夏井関）、港に津口番所、志布志郷に異国船番所・異国船遠見番所が設置され、近世には海運業で栄えた。湾に注ぐ前川（志布志川）流域には帖村があった（百回作成当時）。大慈寺は1340年に創建された臨濟宗東福寺派の古刹で、戦国時代に妙心寺派となった。19世紀前半にこの地を訪れた大坂の商人高木善助

は「総て寺中堂殿茅葺なり」と記している（『薩隅日三州経歴之記事』）。廃仏毀釈により廃寺となったが復興され現在に至る。外交に精通した五山系禅僧が歴代住持を勤めた。宝満寺は前川左岸にあった律宗寺院。現在は1936（昭和11）年に建てられた観音堂がある。永泰寺（現、松原神社）は曹洞宗で志布志郷の菩提所。両寺とも廃仏毀釈により廃寺となった。前川河口の権現島は干潮時には陸続きとなり、頂には宝満寺の鎮守である波上権現（現、蛭見神社）があった。浜辺では地引き網漁がなされ、沖合まで網を運んだ船が魚を追い込んでいた。

（渡辺美季）

